



日本記者クラブ「アメリカの底流」研究会

大統領のリーダーシップ

本間 長世

東京大学名誉教授

2008年7月25日

“ワシントンのリーダーシップというのは、「貫禄」であったと思います。ワシントンがいるということで、マディソンは憲法の案を一生懸命考えるし、ハミルトンは財政政策を考える。ジェファソンは国務長官で外交を考えた。” (p3)

“リンカーンのリーダーシップとは何であったかというときに、やはり雄弁、言葉の力、これが非常に大きかったことは間違いありません。” (p4)

“ウィルソンのリーダーシップを考えるとときに重要なのは、ハウス大佐の存在です。エドワード・ハウスというテキサス生まれの人です。そのハウス大佐がいわゆる懐刀で、ウィルソンの分身とまでいわれた。” (p6)

“「恐れるべき唯一のことは、恐れること自体である」という有名な就任演説の殺し文句、これ、内容は一つもないのです。何もありませんが効き目があった。これはやはりローズベルトがリンカーンと同じく雄弁家であったということです。” (p6)

“トルーマンは、専門家たちの意見をよく聞いて、そのうえで決断をする、果敢実行の人であった。彼はそうした決断力というものが大統領のリーダーシップにいかに必要であるかということを示したということになるだろうと思います。” (p8)

“レーガンについていうと、戦争の後をいかに始末をつけたかというよりは、戦争に至らずに済ませることへの貢献ということを認めてよいのではないかと思うのです。” (p9)

“ヘンリー・アダムズという歴史家が、「ダーウィンの進化論がいかに間違っているかは、ワシントンからグラントまでの歴代大統領の流れをみれば明らかである」などと言ったりしたのですが、どうもグラントよりはブッシュのほうが罪深いのではないか。” (p10)

この研究会は「アメリカの底流」というタイトルが付けられております。アメリカを理解するということは非常に大切なことではあるが、「表層」ではなく、「底流」を研究しようというのが趣旨であると聞いております。7月下旬の35度を超すという猛暑の中を、これだけたくさんの方が集まって、アメリカ理解を深めようというのですから大変なことであります。

それだけに、アメリカ理解を深めるということは、やはり相当いろいろな意見を考え合わせ、つき合わせて、皆様がご自分の経験に照らして判断をされていくべきものであると思います。ある人が言ったから、先生が言ったからというようなことでなしに、アメリカの底流を是非ご自分で探していただきたいと思っております。

民主政治と大統領制

私は、まずアメリカ政治の哲学が何に基礎を置いているのかということについてお話したいと思っております。学者によっては、「ピューリタニズム」を非常に強調する方がいらっしゃいますが、私は少し考えが違うところがあります。ピューリタンが「新世界」にやって来て植民地を作ったのは17世紀のことです。「新世界」というのは、ヨーロッパ人は勝手にそう思っただけで、そのこと自体がヨーロッパ人の傲慢なのですが…。

そのピューリタンの影響というものを、ずうっと今日までアメリカ人が意識していると考え人もいて、私も、ピューリタニズムというのはいかに大切であるかということをお教わってきました。しかし、私の著作の中では、少し強調点をあえて変えてあります。

アメリカ合衆国という国家は、18世紀につくられている。18世紀というのは、ご承知のように、ヨーロッパでは啓蒙主義(エンライトメント)の時代であります。理性尊重の時代であって、ピューリタニズムのようなカルビニズムの考え方というのを皆がとっていたわけでは決してない。ワシントンも、独立宣言の起草者ジェファーソンも、それから憲法起草の原案作成に大きな力があつたマディソンも、初代財務長官のハミルトンも、いずれもピューリタンとは無縁の人であります。強いていうと、後に第2代の大統領になったジョン・アダムズがマサチューセッツの出身である

という程度です。ピューリタニズムがアメリカ建国の支えとなった精神であるというのは、私は言い過ぎだろうと思っているのです。

独立宣言をみても、「神(God)」という言葉を使っておりません。「クリエイター(Creator:創造者)」というのを使っている。いかにもディーイズム(理神論)的な考え方に立っている。連邦憲法にも「神」という言葉は使われていないと思います。ワシントンは、国家と宗教とを結びつけることに反対でありました。

私もピューリタニズムを全否定するものではありませんが、アメリカ政治の哲学を仮にピューリタニズムに強調を置かないとするとどうなるのか。それは、独立宣言に述べられているような、「人は平等につくられている」という、その「平等」と、それから「自由」。イギリス国王の専制に反抗して我々は立ち上がるのであるということで「自由と平等」。これがアメリカの建国の理念であると考えてよろしいだろうと思いません。

それで独立戦争を戦うのですが、独立ということに関して、アメリカ史全体を流れるキーワードがここにあらわれているのではないかと。すなわち「新しく生まれる」あるいは「生まれ変わる」ということであります。例えば植民地建設がすでにそうですね。「ヨーロッパを離れて、新しいコミュニティをつくらう」ということであり、移民たちは「故国を捨てて、もう少しよい暮らしをしよう」と考えたわけです。

それから「共和国をつくる」ということ。ヨーロッパでは、フランス、スペイン、ポルトガル、オランダなど諸帝国の時代であるときに、共和国をつくるということを行った。これも新しいものであるわけです。

ただし、第3代大統領トマス・ジェファーソンは、「自由の帝国(Empire of Liberty)」という言葉を使っております。アメリカは20世紀になってから帝国主義を唱え出したというのではなくて、すでにジェファーソンがエンパイア・オブ・リバティーという言葉を使っているわけでありまして。

ワシントン：建国の父

さて、ワシントンは「建国の父」といわれます。文句なしに、そういってよろしいと思っております。というのは、

独立宣言を発表すると、当然、イギリス国王ジョージ三世は、反乱分子を鎮圧するためにイギリスの正規軍を貴族の将軍に率いさせて新大陸に送る。「反乱分子」は、きのうまで畑を耕していた者が銃を手に行っている、烏合の衆が集まっているものなのだから、正規軍の力で簡単につぶせるというつもりで来た。

そのときにジョージ・ワシントンには、当時の内陸のほうでインディアン(ネイティブ・アメリカン)と戦った戦争歴があるし、フランス軍と戦って捕虜になったりしたこともある。そのような戦争歴を持っているのですが、とにかく彼が植民地の独立派の司令官になるわけですね。

それで、彼は戦いながら民兵を訓練するというところをする。もう試合が始まってから訓練をやっているようなものでありまして、大変な苦勞をするのですが、奇襲攻撃をかけたりします。皆様よくご存じの、「ワシントン、デラウェアを渡る」という有名な絵ができています。クリスマスの夜にデラウェア川を渡って、プリンストンのほうに、イギリス軍を夜中に攻め込むということをしてたりするのです。

ワシントンというのは、身の丈が大抵の人よりは首の分ぐらひは高かった。偉丈夫であります。そればかりではない。彼は風邪一つひかない、病気をしない。それだけではなくて、彼には弾が当たらない。先頭に立って指揮をするのですが、彼の副官ジェームズ・モンローなどは瀕死の重症を負ったりしています。モンローがああときに命を落としていれば、「モンロー宣言」というものは出なかったはずですが、ところが、副官はそんな思いをしても、ワシントンは怪我をしない。そのワシントンがいたおかげで、フランスの助けもありまして、イギリスは結局、講和に持ち込んで、アメリカの独立を認めて、13の州からなる共和国が成立します。

このワシントンのもとで憲法制定会議が開かれ、その憲法のもとでワシントンは初代大統領になるということになります。この憲法は、いま修正27条まで来ていますが、オリジナル憲法はそのままです。憲法を全面的に作り直すということをしていません。ということで、大統領はワシントンから数えて43代ジョージ・W・ブッシュに至るといふところまで来る

わけでありませぬ。

私どもは、「革命」といふと、フランス革命の方が華々しくて立派だといふふうで学校のときに習いました。アメリカ独立革命はわずかしが言及されず、華々しくもないものだから、興味もわかない。ところがフランスはその後、独裁になったり、ナポレオンが出てきたりといふようなことで、「第2共和国」「第3共和国」と作り直し、作り直しが行われた。一方、アメリカは18世紀の末に作った国が今日まで発展を続けてきています。13州が50州になっていますが、国の基礎はそのまま来ている。これは基礎工事がいかによかつたかといふこととあります。耐震構造が大変よくて、鉄筋の数が足りないなどといふことはなかつたといふことになるわけですね。

それで、ワシントンのリーダーシップといふのは、私はやはり「貫祿」であつたと思ひます。ワシントンがいてといふことで、マディソンは憲法の案を一生懸命考えるし、ハミルトンは財政政策を考える。ジェファソンは國務長官で外交を考えました。

非常に皮肉なのですが、ワシントンは大学に行っていないのです。リンカーンに至つては小学校教育すらろくに受けていない。で、このワシントンとリンカーンが、アメリカで最も偉大な大統領の候補で2人が挙がるということになります。ですから、大統領のリーダーシップと教育の関係はどうなつていふか、といふことをテーマにして論文を書かせると、非常に興味深いのであつて、アメリカの大統領になるには東京大学に通わなくてもよろしいといふ答案のほうがいい成績が取れるかもしれない。

その貫祿といふのが、部下に自分の才能を發揮させて、それが生まれたばかりのアメリカの発展にとってプラスになるような方向にかじ取りをするといふことをちゃんとみている。

このワシントンといふ人は、パブリックには笑わない。彼がパブリックに笑つたのは生涯に1回しかないといふわれています。プライベートに笑つたのかどうかは、プライベートですからわからないのですが、多分、笑つたこともあつたらうとは思ひますが、それくらい貫祿があつたといふことなのですね。そのおかげで、アメリカは基礎がしっかりしたうえで、西へ西へと開

拓が進むのです。

リンカーン：連邦分裂を救い黒人奴隷制廃止を導く

それで、リンカーンのときには、北部の州、南部の州という区別ができるようになった。北部は奴隷制というものは経済的にも引き合わないということもあって、次々と廃止していくのですが、南部は奴隷制、特に綿の栽培を始めるようになり、コットン・イズ・キングといわれるようになって、奴隷制による労働力が不可欠になる。

南北戦争は、リンカーンの共和党が、現在、存在する南部の奴隷制度には手をつけないが、西部の新しい土地に進出して州をつくらうというときには、その奴隷制度の延長や持ち込みは絶対認めないというところで、それを承知しない南部11州が連邦から脱退したということから始まったのです。

それで簡単に済むと思ったら、4年以上かかったのですね。リンカーンが就任してすぐに南北戦争が始まりました。日本では「南北戦争」といいますが、これは英語ではThe Civil Warでありまして「内戦」だったのですね。これが長引きました。

それにはいろいろな理由があります。南部にはロバート・E・リーという名将がいたのですが、北部には最初、将軍にいい人がいなかった。それでリンカーンは非常な苦勞をするのであります。だいが経ってから、U・S・グラントという、攻めて攻めて攻め抜く勇猛果敢な将軍が登場しまして、これによってリーを最後に降伏させるということになる。

その南北戦争は北部の勝利、北軍の勝利で終わった。これは要するに、リンカーンが目指したアメリカの統一の維持あるいは回復ということになる。彼は、最後まで南部が脱退したということは認めなかった。これは内戦であるという見方をとり続けて、それで暗殺されるわけでありまして。

リンカーンの大統領としてのリーダーシップですが、リンカーンよりも自分のほうが大統領の資格が備わった政治家であると思っているのが何人もいた。それはそうでしょう。リンカーンというのは、ワシントンの政界では新人であります。1期だけ、連邦議会の議員を務めただけ。イリノイでは彼は独学で法律を勉

強し、聖書やシェークスピアを实によく読んで、文章を練って、大雄弁家にはなりますが、商売はロイヤーであったのです。

ついでにいうと、リンカーンとオバマの間にはある種の共通点があります。オバマもワシントンの政界には比較的新人です。上院議員ではありませんけれども、別に上院議員で名を挙げて、有力上院議員というふうにみられてきたわけではない。それから、オバマはリンカーンと同じく、イリノイのバックグラウンドであります。

学歴は断然違います。オバマの方が最高学歴でありますけれども、自分よりも大統領になるということの適性があると信じている人と予備選挙を戦った。つまり、ヒラリー・クリントンは、本年1月現在でしたら、当然自分が民主党の大統領候補になると思っていた。「オバマとかいうのが少ししゃべり出した…」ぐらいに思っていたかもしれない。リンカーンも、実は、共和党の大統領候補になる前は、ニューヨークの上院議員に有力な上院議員がいて、これが、自分が共和党の大統領候補になると思っていたのです。

もう一つ共通点を加えると、オバマもリンカーンも信念を持っていることは間違いなしですが、過激派には組みしない。リンカーンは、奴隷制の延長に絶対反対ということを主張したことは申しあげましたが、そうかといって、あらゆる過激な手段を使って南部の奴隷制を破壊しようという人々とは一線を画していた。ジョン・ブラウンの暴挙などは非難している。オバマも、自分が師と仰ぐ黒人の牧師が大変過激な発言をしたというので、その教会に通い、その牧師を尊敬していたのですが、自分はそれとは違うということをはっきり申しておりますね。そういう共通点もあります。

それで、リンカーンの暗殺ですけれども、憲法修正第13条、第14条、第15条で、黒人は黒人奴隷制から解放され、アメリカ合衆国の市民になり、そして参政権を獲得する。実際に行使できるという状況ではありませんでしたけれども、そういうところまで行く。

その次にリーダーシップを振るうのはウィルソンなのですが、そうしますと、リンカーンのリーダーシップとは何であったかというときに、やはり雄弁、言葉の力、これが非常に大きかったことは間違いありま

kept us out of war)」というので、再選されました。それから1年以内にアメリカは参戦するのです。ですから、選挙のときのスローガンなどというのは、あまり重きを置いて真剣に聞かなくてもいいということになる一つの教訓かもしれませんね。

それで、やむなく参戦をしたときに、今度は一転して、「世界を民主主義にとって安全な場所にするために」という大風呂敷を広げる。そして、国際連盟案というものを考える。要するに、これは世界大戦後の世界秩序をいかに構築するかということについて、アメリカの大統領がそれを考え出したということであり

ます。それまでは、アメリカはモンロー宣言以来、とにかく新大陸は自分たちのところ、これにヨーロッパは手を出してくるな、我々はヨーロッパのことに干渉はしない、というところから始まっていたのが、ウッドロー・ウィルソンに至って、世界の秩序の構築ということについての案を提案する。イギリス、フランスの指導者たちはそこまで考えが及ばない。ドイツを痛めつけて、自分たちの植民地を確保してというようなことのほうが先立っていた。

ウィルソンのリーダーシップを考えるとときに重要なのは、ハウス大佐の存在です。エドワード・ハウスというテキサス生まれの人です。そのハウス大佐がいわゆる懐刀で、ウィルソンの分身とまでいわれた。彼が方々飛び回りまして、戦争が始まるとヨーロッパにも行って、ヨーロッパの指導者たちとも会いまして、ウィルソンの意向も伝え、ヨーロッパの情勢についての情報もウィルソンに報告をするということをする。そうした側近中の側近的存在というものをを用いるというのは、ウィルソンのときが非常に有名になった。リンカーンにもワシントンにも、そういう意味での懐刀というのはみられなかったわけであり

F・D・ローズベルト：

大恐慌を乗り越え第二次大戦に勝利

その次に挙げましたのはフランクリン・ローズベルトですが、ウォルター・リップマンという有名なジャーナリストが、初め、ローズベルトのことを、「若くて、特に能力があるわけではないが、ただひたすら大

統領になりたがっている男だ」と言った。

リップマンは大ジャーナリストで、皆様方にもリップマンを模範としているという方がいらっしゃるのではないかと思います。彼はそれに値する人で、特に「パブリック・オピニオン」という1922年に著した書物はパブリック・オピニオンについて論じた古典として有名です。

それをじっくり読んでいくと、結局、パブリック・オピニオンというのは成立しないなという結論に行ってしまうので、さらっと読んでおいたほうがよろしいということにしないと、新聞の方はお困りになるのですが、リップマンはそう言っておきながら、36年間、新聞にコラムを書き続けたわけで、結構いろいろ間違っているんですね。当たり前といえば当たり前、どんな偉大なコラムニストもすべて、百発百中というわけにはいかないでしょう。それで、ローズベルトも後から再評価しまして、ローズベルトについて、彼の政策のいくつかについては支持していくことになります。

ローズベルトに与えられた大きな課題は、言うまでもなく、世界大恐慌後のアメリカの復興・再建であり、さらに、新しいアメリカの経済体制へ向けての改革ということであった。それを「ザ・ニューディール」と言った。彼が、自分は新しいやり方をすることをアメリカ国民に約束する(I pledge you a new deal)とだったので、ニューディール、ニューディールということになった。リンカーンもウィルソンもそうでしたが、ローズベルトも雄弁家であります。彼の雄弁は、「デリバリーの雄弁」、つまり述べるときの雄弁ということが非常に効いたのだらうと思います。というのは、一つには、リンカーンがどんなふうにしやべったかというのは、当時、録音がないので、CDに残っておりませんから、わからない。ですが、ローズベルトのは残っておりますから聞くことができる。

「恐れるべき唯一のことは、恐れること自体である(The only thing to fear is fear itself)」という有名な就任演説の殺し文句をかなりきんきんとした高調子で言うのです。これ、内容は一つもないのです。何もありませんが効き目があった。これはやはりローズベルトがリンカーンと同じく雄弁家であったというこ

とです。そして彼はさらに、新しいメディアの一つとなったラジオを最大限に活用して、「炉辺談話(fireside chat)」というのをやって、直接、茶の間の国民たちに柔らかい調子で語りかけた。

それから、彼は政策を説明するのに、いろいろな例えを使うということをした。特に病気の例えをよく使っています。彼自身が小児麻痺(ポリオ)といわれた。三十何歳かでポリオになります。あらゆる療法を試みたけれども、結局、治らずに下半身はしびれたままになる。

私が子どものときにニュース映画をみて、ローズベルトが出てきて、彼は座っているか立っているかなので、彼がクラッチがなくては歩くこともできない、車いすでなければ移動できないなんていうことは、考えてもみたことがない。今日の報道でしたら、たちまちすべてすっぱ抜かれるわけですがけれども、当時はそういうことができた。

ローズベルトは、ジョージアのウォーム・スプリングというところに自分で施設を作って、水の中で水浴あるいは水泳療法を試みたのです。結局は効いてないんですが、彼はそれが有効であると思って、そこに来たほかの人々にも広く開放した。そこでジョージアの庶民たちと一緒に話をする。

自分が病で苦しんだということから、病についての同情心もあり、庶民の気持ちもそういうことから理解できるようになったといわれていますが、演説の中でも病気に例えることが多い。「独裁者というものは伝染病みたいなもので、これが広がったら大変なことになる」と言ったりしたのです。その当時は、ヒットラーを名指しはしなかったと思いますが、1937年に有名なクォレンティン演説というので、「悪い病気を隔離しておかなければいけない」ということを述べる。

隔離するためにはどうしたらいいのかということについては曖昧です。ローズベルトの場合は、ウィルソンと反対に、心の中ではヒットラーをどうしても倒さなければいけない、ヨーロッパの安定のために、ひいては世界の安定のためにヒットラーは放ってはおけないと思っていた。ところが、アメリカ国民は第一次大戦で懲りてしまって孤立主義になっている。「ヨーロッパがどうなるかと、我々の知ったことではな

い」と思っているアメリカ国民を少しずつ、やはりアメリカが力をかさねなければいけない、というふうにどうやって思わせるかということで、彼は苦心惨憺するのです。

そのころのローズベルトの演説で非常に興味深いのは、1941年の演説でドイツについては150回言及しているのに、日本についての言及は12月の真珠湾奇襲攻撃まで4回しかないのです。ということは、いかに彼がアジアをほったらかしてヨーロッパ、特にヒットラーに注目していたかということなのです。ヒットラーを倒すためには、スターリンとも手を握るということであるわけですから。

それで、ワシントンの先例を破って、大統領に三たび候補として登場して、三選される。戦争中、四たび大統領に選ばれる。その後、病を得て亡くなりますけれども、空前絶後ですね。その後は憲法を改正して、大統領は2期限りということになります。そのローズベルトが、ウィルソンのような戦後の世界秩序の構築ということをどれだけ考えていたのか。実は、あまり考えていなかったのではないかとというのが最近の研究者の説です。

つまり、彼は非常に自分に自信を持っていて、自分が話せば相手を説得することができるという自信があった。スターリンとも話せばわかると思っていた。それから、中国を買いかぶっていた。それで、スターリンとか蒋介石とか、それからイギリス・チャーチル。ヤルタ会談というのは、そういう人々と一緒に話をしているわけでありませう。

それで具体的にウッドロー・ウィルソンなどは14カ条を掲げますね。当時、フランスのクレマンソーは、「神様は我々に十戒を与えたもうたが、人類はそれをことごとく破ってきた。ところが、ウィルソンは十四戒を出すというのか」といってせせら笑ったというんですが、フランクリン・ローズベルトが具体的なことを考える前に病を得て亡くなってしまった。

そうすると、戦後の世界秩序の構築というのはいかにして行われたか。これは、トルーマンの手にゆだねられるわけでありませう。

トルーマン：

戦後世界秩序構築へのアメリカのコミットメント

アメリカでは、否応なしに副大統領が大統領になりますね。ミズーリの田舎出身で、戦後の大統領の中でただ一人、大学を出ていない大統領であります。ひたすら歴史の本をたくさん読んだというのですが、ミズーリのボス政治家の下にいた田舎の政治家が、ローズベルトの第4期目に当たって副大統領を入れかえる。入れかえておいて本当によかったのであります。そのおかげでトルーマンが大統領になるんですが、ローズベルトにとって副大統領はどうでもよかったのであって、大統領を四選して、そして亡くなるまでが八十何日か、トルーマンは大統領とさして話したことは一回もないというのであります。

そのトルーマンが後を継いだのですが、彼は何も分からない。分からないというところから出発する。しかし、1945年ですから、たちまちさまざまな歴史的な決断をいくつかいたします。もちろん、広島と長崎への原爆投下、これもトルーマンの決断によって行われたものであります。それから、ドイツ降伏の後のヨーロッパ占領体制、ソ連とイギリス、フランスとどのように統治の仕方を分け合うかというようなことの相談ということもする。

トルーマンの時代に国務長官は次々とかわっていきますが、バーンズとか、マーシャルとか、アチソンとか、そういう人々の意見を実によく聞いて、それを尊重して、学習しながら戦後体制というものをつくっていく。その頃、スターリンは着々とロシアの勢力を伸ばしていく。東ヨーロッパにずうっと浸透していく。これを放ってはおけないということで、トルーマンは、いかにしてこれをせき止めるかということを考える。今日、私たちはジョージ・ケナンの封じ込め政策ということで記憶しているのがそれです。

それで、マーシャル・プランでヨーロッパ復興計画を作り、やがてNATOを作る。平和時においてアメリカが集団安全保障の考えを取り入れて、他の国々と同盟を結ぶというのは、それまでしたことがないのにNATOによってそれを行った。それから、「せん滅せよ」ということで戦ってきたドイツと日本に対する態度を変更し、経済復興をさせて対共産主義に対する

貿易等をする、という政策転換もトルーマンのときに行われたということになります。日本では「逆コース」と呼ばれました。

朝鮮戦争が起こったときも、限定戦争にしてマッカーサーを解任する。マッカーサーが、この機会にさらに攻め込もうと言い出したときに、あえてマッカーサーを首にするということをしている。大変な不評であったのですが。

戦後体制というものは、冷戦体制と呼ばれましたが、40年間、トルーマンが戦後体制の基礎を作ったときにリーダーシップを振るった大統領であるということになるわけでありまして。彼は、専門家たちの意見をよく聞いて、そのうえで決断をする、果敢実行の人であった。トルーマンは、そうした決断力というものが大統領のリーダーシップにいかに必要であるかということを示したということになるだろうと思います。ウィルソンよりも、ローズベルトよりも、外交史上、トルーマンの功績のほうが大きいというふうに最近では研究者たちの間からは評価され始めています。

レーガン：

戦後リベラリズムから保守主義への転換

レーガンはきわめつけの保守主義者だとみなされている。あるいは彼は二流の映画俳優としてハリウッドで活躍して、大統領になったら大統領という役をちゃんと演じたというふうな見方もされてきているのですが、レーガンというのは、元来、フランクリン・ローズベルト支持者でありまして、たしか大統領選挙では4度もローズベルトに投票しているはずですよ。

そのレーガンは、戦後、アメリカのリベラルな知識人たちが共産主義に対する脅威に対抗してAmericans for Democratic Actionという団体を組織したときに、参加を申し込んできている。そういう経歴があるのです。

それから、最近、集められて出版されましたが、レーガンは実に多くの人に手紙を書いているんですね。それから日記を克明に書いているのです。つまり、彼も言葉の人であるわけです。だれかがスクリプトを用意したのを大変上手に読んだ。テレプロンプターを使って、まことに自然に、いかにも自分がそこで考え出

したように話した。「それがうまかっただけの人」ということでは決してないということになって、ゴルバチョフと会見をしますね。ゴルバチョフと会見するまでには、核時代の、核戦争が起こり得る可能性があるかもしれないというので、「考えられないことを考える」(Thinking about Unthinkable)というような論文が書かれていて、実に精緻な核時代の戦略論というものがあつたときに、それを全部すっ飛ばして、ゴルバチョフとさして話をして、核兵器の軍縮という話を2人でつけてしまった。

ここが始まりとなって、ソ連はその後ロシアに戻りますが、少なくとも核戦争はこの2超大国の間では起こらない。それで、私たちもいまや、核の脅威というのは、実は、「拡散の脅威」であって、下手すると使いかねないような国が持つんじゃないかということをお心配しているわけです。アメリカとロシアが核戦争を起こすという可能性を考える必要はまずない、というふうに安心できるようになった。それは少なくともレーガン・ゴルバチョフの会談以降のことなのです。それにすべてを帰するということはできないにしても、それを考えるべきではないか。レーガンについていうと、戦争の後をいかに始末をつけたかというよりは、戦争に至らずに済ませるとのことへの貢献ということをお認めてよいのではないかと思うのです。

しかし、レーガンは同時にいろいろ問題も起こしています。例えば、税金に関してもレーガン以来の共和党の税制というのは、ブッシュに至って金持ち優遇というものが非常にあからさまになったということもあります。これは、アメリカ保守主義の本流的な「セルフリアイアンス」という考え方によるものです。「小さな政府」つまり「自分でやれ」、「政府に頼るな」というものです。アメリカでは哲人エマソンが言い出したもので、「セルフリアイアンス」という論文がありますが、これが保守主義者によって使われてきているのです。

ジョージ・W・ブッシュ： 歴史上最低の大統領候補？

現在のブッシュが「歴史上最低の大統領候補？」というのは、ブッシュの場合に、まず優秀・有能な側近

を自分の周りに置くということに失敗している。側近に振り回されている。ラムズフェルト、ウォルフォビッツというようなネオコンに振り回されたということがあって、そして、9.11というのがブッシュの人気を高めたと同時に彼を決定的に誤らせた事件になるわけですが、あれ、奇貨おくべからざることであるとネオコンが台頭してイラク侵攻に持っていった。ここがもうすでに決定的な間違いです。

イラクにおいて独裁者を倒せば民主主義の国ができる、ということだったのですが、これができない。そんなに簡単にできるものではない。「中東に平和を」というネオコンの理想ではなくて、「中東に混乱を」という状況を作り出してしまった。それから、捕虜に対する拷問。捕虜収容所において何が行われているのかということがいまだにはっきりしない。明らかにジュネーブ条約に反していると思われるような拷問が行われているであろうといわれる。アメリカの建国の精神に反しているし、法律にも反しているということがあります。

それから、盗聴。これは議会が制限つきで認めてもいるようですが、ワイヤータッピングというものも行う。彼らは口を開けば自由、自由といっているんですが、実際には「自由」の名の下に自由を制限するようなアメリカを作り出している。格差社会をますます格差の広がった社会にし、イラク戦争を初めとして、すでに戦費3兆ドルは使っただろうといわれている。それで何を達成したのか。混乱を作り出して、收拾できないでじたばたしてしまして、最後の最後に、北朝鮮に対する政策も何だか急に変わってきて、テロ支援国家指定解除などということを出している。そのような大統領というのは、単に無能だという以上に「負の遺産」を次の大統領に残していく大統領であろうと思うのです。

43代にわたるアメリカの大統領を振り返って、「最低の大統領」という番付を作ったときに、いままではよく候補に挙がったのはグラント将軍です。グラントは将軍としてはまことに立派だった。でも、大統領になったら、彼自身はよかったです、周りが汚職、スキャンダルだらけになりまして、史上最低の大統領になってしまった。ヘンリー・アダムズという歴史家

が、「ダーウィンの進化論がいかに間違っているかは、ワシントンからグラントまでの歴代大統領の流れをみれば明らかである」などと言ったりしたぐらいなのですが、どうもグラントよりはるかにブッシュのほうが罪深いのではないか。

しかし、分かりません。大統領の評価というのは変わるのです。無能だと思ったら有能だとか、有能だと思っていたら、その後、研究が進んだら、そうではなかったということもある。ジョン・F・ケネディのキューバ危機における、あの13日間というので、ケネディがいたから、あのときに世界は平和を保ったのだといわれてきている。しかしこれにも、最近、いちゃもんがつき始めている。アメリカ理解はますます深めなければいけない。変わっていくのであって、我々のパースペクティブが変化し、広がるとともに、改めてアメリカを見、大統領を見、いま、どのようなリーダーシップが求められているかということも変わっていくということになるだろうと思います。

したがって、次の大統領への期待はまことに大きいと同時に、オバマとマケイン、役者が少し不足かなという気はするんですが、これも分かりません。リンカーンが出てきたときに、「何だ、リンカーンが出てくるようじゃ、とてもだめだ」と思われていたのですから。可能性はあくまで捨てないで、今年の大統領選挙を見守ろうということになるのだろうと思います。

質 疑 応 答

中井良則企画委員（司会 毎日）今年の大統領選挙の話が出ましたが、アメリカの人たちは黒人の大統領を受け入れる準備ができていのでしょうか？

本間 これは、投票結果を見なければわかりません。当然、「黒人の大統領はイヤだ」という人はいると思います。そういう人と、もはやそうでない人とがどれくらいの差がつくかということは、だれもはかることはできない。ただいえることは、すでにオバマは民主党の候補になることが確実であるということです。リンカーンのときには、大統領候補は指名大会で決めるまでは分からない。指名大会が本番の候補選びであって、

今日のように予備選挙をずうっと重ねていって、もう勝負がついたというのは、ごく最近のことです。

私は1950年代に留学いたしましたけれども、あの当時ですと、例えば民主党はキープオーバーという人が必ず立候補すると表明するんですね。そして、それに支持が集まる。ところが、キープオーバーはだんだんほかの人に押されていく。ちょうど競馬で先頭を切って走り出す馬は、いつの間にか終わってみるとどこに行ったのかわからないような感じであった。予備選挙も今日のようにたくさんやりませんでした。予備選挙というのは憲法で定められている制度でも何でもないわけですが、いまや予備選挙がものをいう。

ヒラリーとオバマというので、両方で死闘を繰り返したわけですが、ヒラリーが女性大統領候補になったとしたら、これも初めてですよ。だから、もし、ヒラリーが候補者になっていれば、いまおっしゃった質問は、アメリカ人が女性大統領を受ける用意があるかないかということになりますね。そして、これも投票してみなければわからないということになります。

しかし、例えば大統領になるべき人は「アングロサクソン」に限るか、「プロテスタント」に限るかといえ、ジョン・F・ケネディがその例を破るまでは、全部、プロテスタントでアングロサクソンです。ユダヤ系の方は、まだ大統領になっていない。ローズベルトはオランダ系じゃないかと思うんですが、ローズベルトは何しろアングロサクソンが来る前から来ているんですから、これはもう文句はないということになります。

そこで、「カトリックが大統領になるか」ということですが、1928年の選挙ではカトリックの大統領候補が民主党から出たのですが、カトリックであることが理由で敗れ去っているのです。

これまでの歴史から考えると、民主党の指名大会で黒人の候補が誕生するということはちょっと考えられないですね。しかし、オバマが大統領に当選するだろうとみている人はかなり多い。支持率も、全般的な支持率からいうと、オバマのほうが何%か現在は上回っておりますよね。ただし、国家安全保障の問題についてはどうかといわれると、がぜんマケインだということになるのですが。

オバマ候補は、「黒人」といっても、南部黒人奴隷の子孫ではないという点が少し違いますね。だから、いろいろ複雑なのですが、私は、すでに候補に選ばれるというだけでも、アメリカの人々の気持ちの変化というのは明らかだというふうに思います。

ケネディがカトリックだということで、選挙戦中に大変に苦労したのに比べて、オバマはもう少し楽に戦える。実際の投票結果がどうなるかは別にして、もう少し楽に戦えるのではないかという説と、新聞記者の中にも、「オバマだと暗殺されるね」ということをいう方はいらっしゃいます。分かりません。

それからもう一つ、マケインだって、あれだけの高齢者です。たしか71歳でしょう。レーガンよりも高齢になってしまうのではないですか。だから、マケインが大統領に選ばれたとすると、任期中に「後期高齢者」になるのではないかということになりかねないんですが、そういう片方の候補と女性の候補者たらんとする人を破って候補になろうというオバマ氏との戦いです。

ヒラリー支持派の女性の中には、オバマに投票するくらいならマケインに投票するわ、というのがたくさんテレビに出ました。全く情けない話で、いかに選挙がオピニオンで戦われなくて、センチメントで戦われているかということを示していますね。

ただこれはアメリカだけの話ではありません。日本でも同じことです。それが、ポピュリズムの時代ということで、ポピュリズムの時代において選んだ指導者が、しかし、それを乗り越えたリーダーシップを発揮できる場合があるということ。これは常に一つの賭けです。しかし、それにもかかわらず、独裁者を出すよりはそのほうがよろしいというのが、仕方がない、民主政治で行きましょう、ということではないかと思えます。

質問 トルーマンとローズベルトの関係について質問させていただきたいと思います。トルーマンは現役のときは大変評価が低かった。それが最近、戦後の秩序を構築したということで大変評価されていると思います。一方、冷戦が終わった後、ソ連側の隠された資料が表に出てきて、冷戦というものを見直すという

ことも随分進んできている。そういう点からいいますと、スターリンの膨張主義というのが国際共産主義に基づくものなのか、それとも帝政ロシア以来の伝統的な膨張主義であるのかというようなことが、当時から大いに議論されていたと思うんですね。ケナンなんかもそういうことにいろいろ触れていると思います。

そんな中で、結局、歴史としては、国際共産主義の膨張を阻止していくということで、トルーマンがいろんなことを決意をもってやってきたというようなことだと思うのです。その点、ローズベルトの場合はスターリンと二人で世界をコントロールしようということも考えていたのではないかと思う。「歴史のイフ」を言ってみても意味がないかもしれませんが、もしローズベルトが死ななくて、戦後も引き続きアメリカの指導者でいた場合に、何か歴史が変わったというようなことはあり得ると思われませんか。

本間 いまおっしゃった中で非常に大事なことがいくつかあります。おっしゃったとおり、ケナンも含めて、ロシアは帝政時代以来変わっていないという人はいます。ケナンが言っているのは、「共産主義がいかにロシアを変えたか」というよりは、むしろ「ロシアが共産主義をいかに変えたか」ということに注目せよということであり、そのとおりだというふうに最近はみられてきているわけです。

主義(イズム)というのがいかにもろいものか。イズムのために命を捨てるということもある一方で、イズムがもろくも崩れていくこともある。20世紀においているんなイズムが出ましたが、結局残るのはオートクラシーで行くか、デモクラシーで行くかということです。

今日、国際社会(インターナショナル・コミュニティ)ということを書いて、これが認めればよろしいかというふうにいいますが、そもそも「国際社会」というものは存在するのかという問題がある。残念ながら、民主主義とはいえない国々、それから、もうはっきりとオートクラシーの国、それから、オーソリテリアンであるけれども、オートクラシーとは断言できない国とかというような国々に分かれていると思いますが、ローズベルトはイギリスやフランスの植民地領有の帝

国主義には反対ですから、これは戦後において清算すべきだというふうに思っていたはずです。

その点で、スターリンが実は国際共産主義(コミンテルン)を作りますが、そういう名のもとにどれくらい出てくるかということに関して、ローズベルトは、「おれとスターリンが話をつけて線引きをすれば、それでロシアはおさまる」と考えていた可能性は十分あるんじゃないかと思うんですね。しかし、それは長くは続かなかつたろうとも思われるのです。

もう一つは、フランクリン・ローズベルトは、ヨーロッパの復興にどれだけ熱心に力を入れたであろうかという問題もあります。それから、先ほど、「逆コース」といいましたが、「昨日の敵」であるドイツや日本を、あえて新しくみずからの同盟国にしよう。日米安保条約を結ぶというようなことをローズベルトは積極的にやっただろうかということは、ちょっと分からないですね。

というようなことで、もし、ローズベルトがそのまま生きていたら同じではなかったのだろう。ただし、ローズベルトにも「懐刀」がいました。ご存じのハリ・ホプキンスです。外交に関しては、ローズベルトの懐刀として、ホプキンスがヨーロッパを飛び回っていたわけです。しかし、ホプキンスも病気になりました。ですから、ローズベルトが生き残っても、ホプキンスが亡くなったらどうなつたろうかというようなことがありますから、これまた歴史の経路が変わったのではないかなという気はいたします。

質問 ワシントンをはじめ、アメリカ建国の人たちは理神論者であって、「政経分離」というのがアメリカの建国の基本的な理念であるというお話でした。それがオーソドックスなアメリカであろうと思うんですが、ブッシュを当選させた2本の柱のうちの一つはネオコンであり、もう一つは宗教右派であるといわれてきました。これは、ブッシュがアメリカの歴史の中で鬼子的な存在であって、たまたまブッシュのときに宗教右派の影響力が強くなったということなのか、それともこれも一つの潮流であって、これから先も宗教右派というのがアメリカの大統領選挙などに大きな影

響力を持ち続けるのか。

本間 これも大事な問題点で、皆様、いろいろなお考えがあるだろうと思います。アメリカの精神の基本の柱はピューリタニズムと開拓者精神である、ということを私は学生のときに教わってきました。いまおっしゃった宗教右派というのが力を得るとするのは、むしろ20世紀になってからの新しい動きであると思います。

進化論のダーウィンが『種の起源』を出したのは1859年ですね。これはアメリカでは早く受け入れられるのです。それで、ずうっと進化論が受け入れられてきたのですが、20世紀になってからファンダメンタリストの力が強まるということになります。

聖書の言葉をそのまま信ずると、世界は神が6日間で作りたもうて、それからマリアが精霊によってナザレのイエスを身ごもった、ということになるのですが、この一連のお話をそのままに信じたのが主としてバプティスト、メソディストだった。これはピューリタンとは違います。ピューリタンとは明らかに違いますが、南部で非常に大きな勢力なのは、バプティスト、メソディストらの「福音派」と呼ばれる人々であることはご存じのとおりです。

黒人もバプティスト、メソディストが断然多いですね。マーティン・ルーサー・キングもそうですし、ブッシュ大統領は大酒飲みでしようがなかったのが、「改心」をする転機になったのがビリー・グレアムという説教家だった。彼の説教を聞くと、途中で悔い改めた者が壇の近くまでぞろぞろ出てくるんですね。皮肉屋は、最初の1人はサクラじゃないかなどと言ったりする。そのビリー・グレアムの影響もあってブッシュはずっと酒を断って、「敬虔なるクリスチャン」ということになりました。

宗教右派は、これもテレヴァンジェリストで、テレビを最大限に活用し、メガチャーチという物すごく大きな教会をつくって、一挙に何千人くらい入るところで説教をする。ですから、最新のハイテクを使って最も古い教えをそのままに信奉せよというわけです。ヨーロッパ人にはなかなか理解できないだろうと思われれますが、その人々が政治的な力を持っているという

のはそのとおりだと思います。

しかし、それらの人々が今年の選挙で決定的な力になるかどうかは分かりません。マケインが宗教右派の支持をどれくらい得て共和党の票を伸ばしていくのかということは、私にはいまは分かりません。

ネオコンは、かつては大変な勢いだったのが、いま、ちょっと振るわないですね。ですから、ブッシュを押し上げてきた勢力が、そのままマケインに移るということには、必ずしもならないのではないかと。

何よりも、今度の選挙の争点というのは何であるかということになれば、結局は経済ということになるであろうと思います。外交の問題というのは大統領選挙の争点には元来なりにくいものでありますから、アメリカ軍をイラクから引き揚げさせようというような話とか、アフガニスタンをどうするかというような話については、争点の一つにはなるでしょう。しかし最大の争点は両候補のいずれが有効な経済政策を打ち出すことができるかということになっていくのではないかと思います。

その場合に、両陣営とも、専門家がたくさんついている。オバマの周りもすでに300人くらいいるという新聞記事もあります。そういう人々の中からどういう意見が打ち出されるのか。ローズベルトのときは、非常に曖昧な「ニューディール」で済んでしまったのですけれども、彼が少し具体的に言ったことは大体間違っている。ローズベルトは、最初の選挙戦では財政健全主義を唱えていたのであって、最初からケインズ経済学を唱えていたわけではない。ケインズがローズベルトに会ったときに、「政治家としては並々ならぬ能力を持っているが、経済学については全くの無知だ」と言った。それがニューディールで経済政策、アメリカの復興のための大統領ということになっているわけなので、だれの意見を使って、どの程度具体的に選挙戦中に何をいうか。それから、当選してからどうするかはわかりませんが、私は経済政策が非常に大きな争点になっていくのではないかとこのように思います。

日本でもいま問題になっていますが、ヘルスケアの問題ですね。アメリカの医療保険制度が非常に不完全だということは前から問題になっている。これに手を

つけようとして、クリントン政権は失敗したわけですね。それを今度はどうするかというような問題を選挙戦で打ち出すのか、それともちょっと危ないから当選してから話にするのかとか、いろいろそういう問題はあるだろうというふうに思いますので、その辺がみどころの一つになるのではないかと思います。

質問 先生は、オバマ対ヒラリーの対決はどういうことだったんだというふうに思われますか。オバマの勝因は何だったと思いますか。

本間 私が本日の話で強調してきた、「雄弁」というのは非常に大きな要素ですね。ヒラリーもよくしゃべる人ですが、オバマは「オーラつきの雄弁」というのを持っていた。オバマの「Change, Yes we can」は、ローズベルトのニューディールとか、「The only thing to fear is fear itself」と同じ効果をもたらした。The only thing to fear is fear itself などというセリフはハーバード・フーバーが言ったって、全然効き目がなかったはずですね。「Change, Yes we can」はオバマが言ったら、みんな、もう震え上がっちゃったというところがある。「電気が走る」という力を彼は持っているということが一つ。

それから、彼の選挙参謀たちの鮮やかな作戦勝ちということもいえるのではないのでしょうか。つまり、アイオワなどという、実際の選挙では選挙人票の数もほんの少ししかないところに、オバマ陣営は全力投入した。持っている力を全部そこにつぎ込んでしまった。そして、オバマの印象を一挙に全国的に植えつけるということに成功したのです。

それからもう一つは、組織の仕方です。テレビ・メディア時代の、あるいはインターネット時代の組織の仕方において、オバマの方が進んでいた。つまり、大口の寄付を集めて「これで一応十分な資金ができました」というよりは、「10ドルで結構、20ドルで結構、インターネットで直ちに申し込んでください」ということを呼びかけた。そうすると、10ドルなら出せる、20ドルなら出せる、という人々が数の上において断然多いわけですね。大口の寄付ができるという人はそんなにたくさんいるわけではない。大口に頼っ

たヒラリー派に対して、オバマの場合は、小口ではあるが膨大な数を集めましょうという戦術です。それはインターネットがあるからできるので、その組織力の違いということが、少なくともオバマが急激にヒラリーを脅かすに至ったという秘密ではないかと思いません。

そして、ビル・クリントンも余計でしたね。彼は焦りましたね。焦って、女房を何とか擁護して、余計なことを随分言ってしまった。大体ビル・クリントン自身も雄弁家ですし、彼はとにかく2期、8年務めた大統領という輝かしい実績がある。彼の本は実に売れて財産をたくさん作ったんですが、それもつぎ込んで女房のためにというのが、むしろ裏目に出ってしまった。

ヒラリーがもし民主党候補になって当選しますと、最近のアメリカ政治史というのは、クリントン家とブッシュ家が互いに交代し合っているだけということになってしまう。新鮮味に欠ける。そこに彗星のごとくオバマが現れた。実は彗星として出てきたのではな

くて、周到な作戦を立てて出てきたということ。それが成功したんだということだろうと思います。

オバマは、いまヨーロッパで非常に人気がある。「私は市民(シチズン)として来たのであります」といいながら、やっぱりメルケルが迎えて、もう何週間も前からオバマが来るということをヨーロッパの雑誌が取り上げている。「ブッシュの顔は見たくもない」というヨーロッパの人々に比べると、大変な違いです。

オバマ氏は、実は未知数の部分が非常に多いのですが、現在のところは、それがむしろ魅力の一つにさえなっている。その可能性に賭けたいという思いが出ている。うまくすれば、世界中で悪くなっているアメリカのイメージを転換させるためには、ビル・クリントンの女房がまた出てきましたというよりは、Change, Yes, we can のほうが力を持っているということになるかもしれません。

文責・編集部